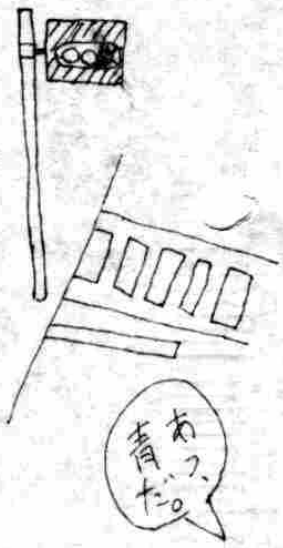
恐怖のナイトラン



大岡山↔江ノ島

日比野 千俊

第一章 出発(たびだち)

ぼくは、二度と思い出したくないと思って、あのことは、頭のいちばんすみっこに記憶させておいたのだが、ついに書かねばならない日が来てしまったようだ。

だれか無責任なやつが(更はぼくだが)部会で、「今年は全員に原稿を書かせる。」と言ったのが悪いのだ。あえて自己弁護をするならば、ぼくが全員と言ったのは、一〜三年のつもりであって、四年のぼくたちを含めたつもりは全くなかったのだ。しかし、あれ以来金谷が、

「日比のさん、早く原稿書いて下さいよ。」

としつこく、せまって来るのだ。ここで居直る。オレが悪いんだよ。あんなこと言い出したオレが。書けばいいんだろ、書けば。あのことを。

あれは学園祭三日目の昼ごろであった。二年生の下宿生四人組(冨田、金谷、名取、沢木)が、何やら、よからぬ相談をしているではないか。聞くともなしに聞いていると、なな、なな、なんと、ナイトランをしようという話ではないか。ナイトランなら、ぼくは大好きである。まず普通のフリーランと異って、早起きをしなくてもすむのだ。朝よりも夜のほうが、ぼくは好きなのである。

「よし、ぼくも行こう。」てなことで、話がとんとんとまとまり、深夜十二時に、江の島の日の出を目差して、集ったのは結局ぼくと、下宿四人組、そして一年の小島の六人であった。

第二章　小島の家

フロントバックを、平均三百円分のパンでいっぱいにして、ぼくたちは、夜の中原街道を快調に飛ばした。まず目差すは小島の家。小島が、手ぶくろとカメラを、とりに行きたいと言うので、みんなで押しかけて、お茶でも飲ませてもらおう、ということになってしまったのだ。

中原から第二京浜へ行き、小島が曲れと言った交差点を曲ると、ガビーン!! 小島家の前に立ちはだかるは、壁のような坂。フロントとリアをめいっぱい落として、やっとのことで、小島の家の前へたどり着き、お茶をもらい、がケんとんとんとまとまり、ブレーキゴムをりムにさびりのような坂を下り、つかせ第二京浜へ戻った時の小島の第一声は、

「あ！　カメラを忘れた。」

あとの五人は口をそろえて、

「一回生、カメラを取ってこい。」

かわいそうに、小島君は、またもその急坂を往復したのでした。

小島の家を出て、横浜をすぎて、道路標識の

というのを見ながら走っていたら急に、交通量が多くなった。

通行止め）という、標識がなかったはずなのに、「横浜新道」に入ってしまったのだ。あわてて わき道へそれ、道にさんさん迷ったあげく、やっとのことで旧道に出ることができた。

第三章　貸切道路（すいているみち）

横浜新道とちがって旧道のほうはまったく車が通らないといってよいくらいであった。だいたい五分に一台くらいしか出会わなかった。

この道が恐怖であったのだ。このナイトランが選ばれた者の走りであることを忘れていたのだ。一番前を走っていたぼくが信号が黄色の時交差点へ入り、交差点の中央で赤になってしまったのである。もちろん交差点を出る時は赤である。後のやつらを待っていてやるかと、左端に寄って、後をふりむいて止ると、一気に五人にぬかれたのである。（当然五人とも信号無視）「こんなことがあって良いのか、あいつらはん間か。」と、つぶやきながら、必死になって五人を追いかけ、十分ぐらいフルスピードで、信号や標識もろくに見ずに飛ばし、「さすがにここまではついてこれまい。」と、ふり返ると、五人とも、ピターッとすぐ後についていたのである。これでは、ファストランである。

あとは、もうめちゃくちゃである。藤沢に着くころまでに、信号無視を、いくつやったことやら。二十いくつまで数えていたのだが、あとはもうそれさえ、めんどうになってしまったのだ。おかげで江の島へ着いたのは四時前である。

第四章　江の島（えのしまえのしま）の朝日

四時前といえば、日の出までにたっぷり二時間以上あるのである。おまけに、自転車からおりると、すごい寒さである。江の島の公園のすみっこで、たき火をして、ふるえながら日の出を待ったのだ。

やがて、空がしらじらと明るくなり、しばらくすると、東の空半分が金色に光りだした。その朝やけの部分がだんだん狭くなり、明るさを増し、今にも朝日がのぼりそうになってきた。

みんな少しでも早く朝日を見ようと、寒い中を立ってずっと東の方を見ていた。ぼくなどは高いところのほうが日の当るのが早いと思い、藤だなの上に、むりやりのぼって待っていた。しかし、それから二十分たってやっと朝日の姿を見ることができたのであった。

長く待ったかいがあって、ひじょうに感動した。山の端から一点の光る点が出現し、ぼくらに一条の光をなげかけ、その点がだんだんと大きくなり、ついにお待望の朝日の出現となったのだ。

第五章　帰路（かえりみち）

ぼくたちは、あり余るぐらいのパンで腹ごしらえをして、一路東工大をめざして戻ることになった。　疲れた体をむちうって、藤沢まではたどりついたが、そこで六人とも半ばダウン。サテンでコーヒーとモーニング・サービスのトーストを食べ、二時間ぐらい仮眠をとった。それで少し元気をとりもどし、また自転車にまたがった。

横浜で、小島の友だちで東工大の学生だというロードレーサーの二人組と合流し、家にもどる小島をのぞいた全員で第二京浜をつっ走った。さすがに昼間は車の量が多くて、東工大に着いたときは、排気ガスと神経性疲労と肉体的疲労でくたくたであった。まったく恐怖のナイトランであった。